

平成 21 年 5 月 12 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520163
 研究課題名（和文） メアリ・ウルストンクラフトに見られる
 女性と自然の相互隠喩表象の研究
 研究課題名（英文） A Study on the Metaphoric Mutual Symbol
 between Nature and Women in the Works of Mary Wollstonecraft
 研究代表者
 石幡 直樹 (ISHIHATA NAOKI)
 東北大学・大学院国際文化研究科・教授
 研究者番号：30125497

研究成果の概要：

本研究では、ウルストンクラフトの旅行記で多くの読者を得た『北欧紀行』を中心にそこに潜在する女性＝自然の隠喩構造を探った。その結果、男性に抑圧される女性と人間に利用される自然という並行関係にとどまらず、文明化と進歩という概念によって啓蒙・開発・搾取される存在として共通する属性が両者に与えられていることが分かった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	540,000	3,540,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学

1. 研究開始当初の背景

申請者は 1990 年頃からウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) を研究対象としており、1993 年の日本英文学会での口頭発表「Mary Wollstonecraft の女性教育観」では、代表的著作『女性の権利の擁護』の女権思想を、初期の徳育本 (conduct book) と比較し、強硬な女権論の裏面には封建的な女性観が隠れていたと指摘した。

1993-94 年度には科学研究費補助金一般研究 (C) (平成 5～6 年度)「ロマン派からヴィクトリア朝作家への自我意識の展開に関する史的研究」(大友義勝、原英一、石幡直樹、他 1 名、5 年度 1,200 千円、6 年度 1,000 千円) を得て、『擁護』以降の彼女の思想の

変化を自我意識との関連から考察した。その成果を発展させて英文論文 "Mary Wollstonecraft's Introspective Journey in Scandinavia" (*Enlightened Groves: Essays in Honour of Professor Zenzo Suzuki*, 1996) にまとめ、後期の『北欧紀行』では内面の吐露が見られ、女権拡張論が初期の評論より複雑になってその自我意識の展開には近代的自我の萌芽が見られると論じた。

1998-99 年度の科学研究費補助金基盤研究 (C) (平成 10～11 年度)「英文学における環境文学批評の可能性—環境意識の形成と英文学の自然観」(石幡直樹、大友義勝、小沢博、ピーター・ロビンソン、10 年度 2,300 千円、6 年度 2,400 千円) による研究では英

文学の自然観における環境意識の源流を探り、論文「Ecocriticismで見るLyrical Ballads」(1998)でワーズワスと英国の環境保護論の関係を、論文「田部重治とワーズワス」(1999)でイギリス・ロマン主義の自然観がワーズワスから英文学者・登山家である田部を通して我が国に与えた影響を考察した。この研究はさらに、日米英ネイチャーライティングのアンソロジー(2000)とJonathan Bateの*Romantic Ecology*の翻訳(2000)の出版につながった。

ウルストンクラフト研究では1997年のイギリス・ロマン派学会シンポジウムでの発表を「メアリ・ウルストンクラフトの分別と多感」(『英文学研究』第77巻第1号、2000年)にまとめ次のように論じた。女性の弱点でもあり美德でもあるとされた感性は、彼女らを規定し縛りつける鎖でもあったが、逆に理性によって彫琢された感性は、男性の築いた道徳律の牢獄から逃れる手段ともなった。

2002-03年度は科学研究費補助金基盤研究(C)(平成14~15年度)「イギリス・ロマン主義における環境意識の展開」(石幡直樹、大友義勝、14年度1,100千円、15年度900千円)を得て、英国ロマン主義文学の自然愛に見られる環境意識の源流を探り、論文「女としての自然」(2003)で、他者としての自然/女性の表象を考察し、「女/自然」の権利回復の動きを文学作品のテキストに探った。日本英文学会シンポジウム発表「希求のための喪失—アイロニーとしてのエコポエティックス」(2003)では、喪失と希求が表裏一体であることのアイロニーを、ロマン主義の自然愛と現代の環境危機の両者に検証した。

この研究をさらに展開して「プシュケーの羽と詩人の翼」(『ロマン派文学のすがたII』2004)では、キーツのオード「プシュケーに寄せて」に描かれた理想の詩人像を、周囲の森の木々との共生を願うエコロジカルな思想の萌芽と捉えた。また、「想像の風景—ロマン主義の想像力論の系譜」(『地誌から叙情へ』2004)では、ロマン派詩人の想像力が、眼前の自然風景から遊離して心象風景へと展開していく様子を追い、エコクリティシズム(環境文学批評)はこの想像力論の理解においても有効であることを論じた。

本研究はこれら一連のウルストンクラフト研究とロマン主義の自然観・環境意識研究を基盤として、それらを融合発展させるものとして準備・企画されたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-97)の旅行記に見られる自然描写の中に、「女としての自然」と「自然としての女」という双方向的な二重の隠喩表象を探り、英国ロマン主義文学における、人間による抑圧の対象となった自然と、男性による抑圧の対象となった女性と

いう類比概念の成立を検証し、その意味を考察することである。

イギリス・ロマン主義は、全体論的・総合的な世界認識、自然における相互依存性や関係性の強調、有機体的宇宙論などのような現在の環境意識の先駆けと言ってよい特徴を持つ。だが、ロマン派詩人には現代的な環境意識の源流を見いだせるのと同時に、彼らの自然観には人間中心的な側面も見られる。

このようなとき、我々に興味深い示唆を与えてくれるのが「女としての自然」あるいは「自然としての女」というトポスである。特に女性の描く自然と、その視線の先に像を結ぶ女性としての自然は我々の自然観の検証に多くのヒントを与えてくれる。ウルストンクラフトの『北欧紀行』(1796)には、テキスト内の存在として自然に声を与え、自然を管理することなしにただ記録し、テキストの中心で支配する観察者としての話者の姿を消し去っている様子がうかがわれる。

人間/男性中心主義の措定する、他者としての自然/女性は、「自然としての女」と「女としての自然」という絡み合った二つの具体的な姿を提示する。P・マーフィによれば、この「女としての自然」に言葉と主体性を与えることは、突出した男性としての自我を中心から追いやり、環境としての自然をそこに据えることになる。ロマン主義的自然愛と近代的自我(人間中心主義)が現れた時代の女性作家による旅行記という文学テキストを主な対象として、ロマン主義による近代的自然観の成立の側面に、「他者、非・主体、非抑圧者」としての「女/自然」の姿を検証し、現代における環境思想、特にエコフェミニズムにつながる深層意識が存在したことを解明したい。

環境の概念は、文学の解釈のひとつの視座として近年多くの関心を呼ぶようになった。たとえばグロットフェルティは、人文科学すなわち歴史学、哲学、法学、社会学、神学などの環境意識や自然保護との接点を具体的に挙げて、文学研究の「緑化」(greening)も促進されるべきだという。その上で具体的なスタンスの取り方として、われわれは自然の表象、自然という舞台、環境知識、大地の比喩、ジャンルとしてのネイチャーライティングについて考え、民族・階級・性差と並んで「場所・土地」が批評のカテゴリーとなり得るかと問いかけるべきだと言う。

本研究は、このような近年の環境批評(ecological literary criticismあるいはecocriticism)の展開を意識しつつ、フェミニズムの鼻祖とされるウルストンクラフトのテキストから、「他者・非抑圧者」を共通項として成立する自然=女性の比喩表現を抽出して、その意味を分析することを目指している。それは、単なる女性と自然の類推関係

から導かれるエコ・フェミニズムの領域にはとどまらず、ラディカルな女権論者としてのウルストンクラフト像に新たな側面から光をあてることになるはずで、そこに本研究の特色がある。ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』(1792)において、理性教育を通して女性も合理的精神を持つべきであると主張して、感性崇拜(cult of sensibility)の批判を展開した。だが、『擁護』の思想が再吟味される『北欧紀行』では、ウルストンクラフトは娘の将来への不安を赤裸々に語って、急進的な女権論者の顔は影をひそめ、一人の母親の姿を見せる。一人娘の将来について「私は震える手で感性を開拓し、精妙な感受性を育てあげようと思います」と述懐する彼女は、もはや感性の修養に『擁護』の場合のような、絶対の自信と自負を持っては臨んでいない。

当時の未開の地であるスウェーデンやデンマークの自然と接したことが、いかなる影響をこの女権論者に与えたのか、そしてその自然の表象を彼女が自らの女性としての表象と重ね合わせるがあったとすれば、それは彼女の思索と著作にどのように反映されたのか、そして最終的には彼女の晩年の思想の変遷あるいは深化に北欧の女性/自然表象が寄与するところがあったのかどうかについて解明したい。

自然と女性のアナロジーに関しては、すでに文学、美学、哲学の分野で多くの先行研究が存在する。W・J・T・ミッチェルは「帝国の風景」で風景面に潜在する自他の差異化の作用を巧みに抽出し、見られる風景には客体や他者としての存立を迫られる要因がすでに潜んでいると言う。また、L・ジョーダノヴァによれば、見る/見られる行為にも性差が設定され、前者には主体と自己そして「男」が、後者には客体と他者そして「女」が包含されてきた。風景や自然や大地はこうして女性化された領域となり、馴致と開墾の対象となり、「非・主体」となる。畏怖と嫌悪の入り混じる「女としての自然」の隠喩となった大地の女神は、人間の自我意識の発生にまで遡り太母の系譜につながる。

また、環境批評やエコ・フェミニズムでは女性と自然を平行関係で捉え、見過ごされてきた視座からのテキスト解釈が試みられている。たとえば、沈黙は永く女的美徳とされてきたが、S・グリフィンが「彼が彼女にしたことは、彼が彼女にしてもよいと思ったことと結びついている」と語る言葉は、その沈黙という負の行為を打ち破ろうとする。彼女の環境中心の自然観は、女と自然をエコロジーの概念で結びつけ、抑圧されてきた両者の復権を目指す。あるいは、文明が語らなかつた獣性や未開こそが自分の「家」と捉えるル・グインは、男のその領域に対する恐れがミン

ジニーの淵源だと言う。

本研究は、これらの研究動向を背景にして、ウルストンクラフトの旅行記テキストに顕在あるいは潜在する女権論と自然観との関連性を掘り起こし、環境思想で主張される自然と人間との共生という概念に加えて、「女性と男性の共生」という新たな視点からの解釈をほどこそうとするものである。人間体験に見られる「性差」と「場所」という二つの根本基準の統合と融合を、ウルストンクラフトというフェミニズムの始祖に探るところに独創性があると言えるだろう。

3. 研究の方法

平成18年度はウルストンクラフト、英国ロマン主義と自然観、環境批評などに関連する図書・資料を購入して考察を加えた。また、出張しての資料収集に必要なポータブルパソコンと関連機器を購入した。

本研究は、研究代表者による関連著作や資料の分析と解釈を主な方法とする。直接の研究対象は『北欧紀行』となり、その成果の一部として、全体あるいは部分の翻訳出版が進行中である。著作と資料の分析以外にも、国内・国外に資料収集を目的とした出張を行った。

ウルストンクラフトの女性観については、研究開始段階で次のように捉えていた。感性(sensibility)は18世紀に中上流階級の女性の重要な徳目と見なされるようになり、文学においては他者の感情や悲哀に対する鋭敏な感受性を意味するようになった。ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』において、理性教育を通して女性も合理的精神を持つべきであると主張して、感性崇拜(cult of sensibility)の批判を展開した。だが、他方で彼女は社会風潮に毒されない感性を、人間の持つ貴重な感覚として称揚してもいる。また、その感性批判の態度は曖昧で揺れ動く様子を見せる場合もある。

『擁護』で批判される感性とは情熱を恣にし、女性を興奮した感情の犠牲にするものであった。また、ウルストンクラフトの自伝的小説『メアリ』の主人公は、「感性は人間の魂が感じるものの中で最も精妙な感情」であるという「感性の狂詩曲」を、作中で記している。未完の哲学的物語「幻想の洞穴」や小説『女性の虐待』にも描かれたこれらの感性は、『擁護』で攻撃されたそれとは違って、人に幸福や慈悲をもたらす善なる心の、素早く繊細な動きを指している。

『擁護』で排斥されたのは「当時の女性にもてはやされた気取った感性(artificial sensibility)」であり、『メアリ』で揶揄されたのは「偽りの感性(false sensibility)」であるが、ウルストンクラフト自身にも感性にまつわる内なる揺らぎが存在し、教育書『女子教

育考』には、自らの性の特徴ともされた感性に対する相反する態度の兆しが見られる。それは、若い女性への教えとして感情の抑制を説きつつも、情熱の根絶は不可能だからするべきではないと述べるくだりや、若くして結婚すべきではないと世の娘たちに説きながら、男女の触れ合いについては因習的とも思える受け身の女性像を示す一節において、最も顕著であると言えよう。

さらに、『擁護』の思想が再吟味される『北欧紀行』では、ウルストンクラフトは娘の将来への不安を赤裸々に語って、急進的な女権論者の顔は影をひそめ、一人の母親の姿を見せる。「私は震える手で感性を開拓し、精妙な感受性を育てあげようと思います」と述懐する彼女は、もはや感性の修養に『擁護』の場合のような、絶対の自信と自負を持っては臨んでいない。

また、文学作品における「女としての自然」あるいは「自然としての女」の隠喩表象に関しては、このように考えていた。ワーズワスの「榛採り」には、「自然」につきまとう性的隠喩が読みとられ、そこに「女」の存在が感じ取られる。C・ハリソンの言うように「女性の体の一種としての自然の描出はつまるところ、観念的規範となっており、コロドニーは『大地の形』でそれらの象徴表現を検証して、開拓時代のアメリカで風景がいかにか女性の隠喩で捉えられたかを明らかにしている。

『チャタレイ婦人の恋人』のコニーが、森を大地の数少ない「犯されない場所」だと見るように、D・H・ロレンスは近代資本主義文明による大地と人間性の陵辱に対して異を唱える。また彼は、鳥の死骸のある森で春を告げる鳥の鳴き声に接して、艶めかしい生命の再生の神秘を讃える。エロスには常にタナトスがつきまとい、個としての「死」が次世代を育むのである。

本研究では、このような「女としての自然」あるいは「自然としての女」の隠喩表象を、女権論者ウルストンクラフトの作品中から抽出し、ウルストンクラフトの女性論研究とロマン派的近代自然観研究の融合を試み、それらの理解に新たな光をあてた。

4. 研究成果

本研究では、「女としての自然」あるいは「自然としての女」の隠喩表象を、女権論者ウルストンクラフトの作品中から抽出し、ウルストンクラフトの女性論研究とロマン主義の近代自然観研究の融合を試み、それらの理解に新たな光をあてる分析を行った。

男は母性あってこそその再生産の原理を直観し、それが途絶えることを無意識に恐れ、自然の中にそれを保証する表象を見いだそうとした。同時に、その恐れ of 不可知の根源である「女」を忌避し嫌悪し抑圧した。個体

ではなく種としての肉体の消滅の恐怖が、自然のなす生／性の営みを希求させ、その生への渴望の凝縮したものが「女としての自然」の表象であったと考えられる。

本研究では、ウルストンクラフト、英国ロマン主義とその自然観、環境批評などに関連する図書・資料を購入して、関連著作や資料の分析と解釈を進めた。特にウルストンクラフトの旅行記で多くの読者を得た『北欧紀行』を中心にそこに潜在する女性＝自然の隠喩構造を探った。その結果、男性に抑圧される女性と人間に利用される自然という並行関係にとどまらず、文明化と進歩という概念によって啓蒙・開発・搾取される存在として共通する属性が両者に与えられていることが分かった。

これらの分析を通して、ウルストンクラフトの旅行記テキストに顕在あるいは潜在する女権論と自然観との関連性を掘り起こし、環境思想で主張される自然と人間との共生という概念に加えて、「女性と男性の共生」という新たな解釈の可能性を示した。人間体験に見られる「性差」と「場所」という二つの根本基準の統合と融合を、ウルストンクラフトというフェミニズムの始祖に探ることができた。なお本研究の一環として進めてきた『北欧紀行』の翻訳は、来年度中の刊行を予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. 石幡直樹. エコクリティシズムの展望 (独立行政法人日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業研究領域V-3 文学・芸術の社会的媒介機能「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書. pp. 88-92. 2009年3月.) (査読無)
2. 石幡直樹. 反ロマンスとしての『レイミア』 (『国際文化研究科論集』第16号 (東北大学大学院国際文化研究科) . pp. 1-15. 2008年12月 (査読有))

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石幡 直樹 (ISHIHATA NAOKI)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：30125497

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者